

これみ
週刊「考歴民」 No23

2021.8.30. 交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

=土地に刻まれた歴史=

「あなたの足下に地名がある」

「地名とは、人間とかかわりが出来たから出来たのだ。この「出来たから出来た」ことを、調べていたら、大変なことがわかる。

人間の感情も知恵もよくわかる。

あなたの立っている大地の地名から始めよう。

地名 丹羽基二著

郡津（こうづ）

郡津は、古代、律令社会の時代から交野では一番開けた土地である。

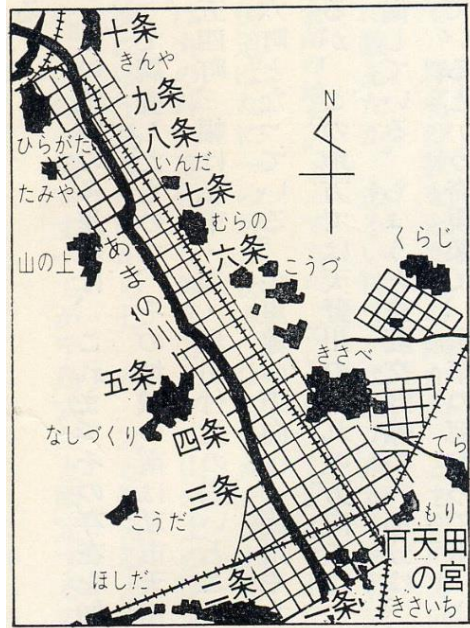
それは全国を国郡制に定め、河内国交野郡と名付けられた。その交野郡は天野川筋を中心とする豊かな土地であった。



平安時代後期交野地方想像復元図

片山長三氏画

私市を起点とし枚方市禁野までの条里制による土地区画が実施され、班田収授法による口分田を班田農民が耕す。天野川筋に条里制がひかれ、その中心になったのが郡津であった。



交野郡の中心地として郡衙（ぐんが）が置かれ、郡司が村を指導し、郡内で生産された米を貢租として徴収した。

郡衙とは・・・律令〔りつりょう〕時代の「郡」をおさめるための役所です。今で言う市役所と同じくらいの役割です。郡家〔ぐんけ〕とも言います。

当然集められた貢租米が蓄えられるのであるから、郡衙にはたくさんの米蔵が建っていた。この郡衙の村として発展したのが郡津である。

「交野市史」によれば、郡津の古い名前は「郡門村」で、読み方は「こうど村」であった。

意味は交野郡の郡衙にできた村である。

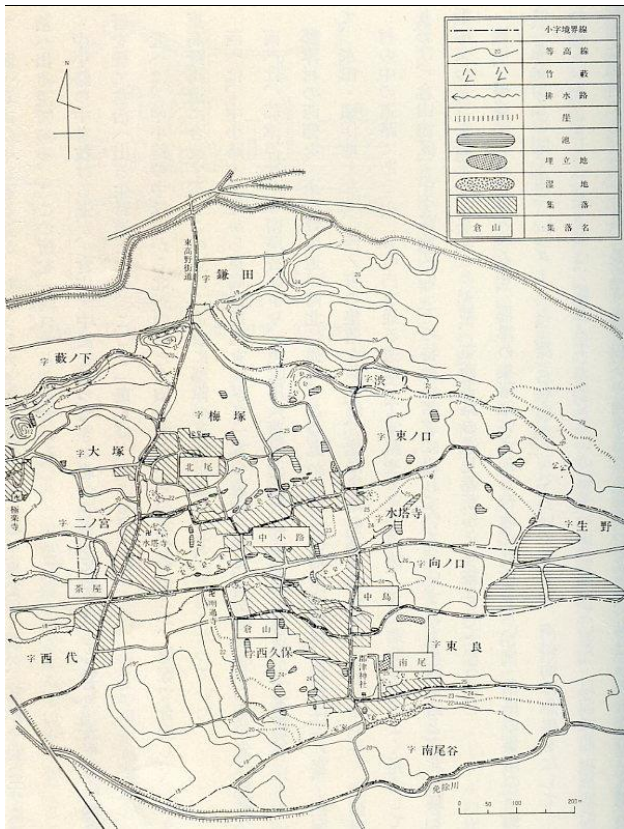
「こうど」がなまって「こうづ」となったが、字は相変わらず「郡門」と記していた。

しかし、江戸時代の末、文化元年（1804）大阪町奉行の命により「こうづ」の発音どおりの「郡津」と改めたとある。

郡津の集落地名

郡津の古い集落の町名には、南尾（みなお）、倉山（くらやま）、中島（なかじま）、中小路（なかしょうじ）、茶屋（ちゃや）、北尾（きたお）、西の町（にしっちょ）があった。

郡津の集落では、茶屋、倉山、中小路が時代的に古い集落であろうと思われる。



郡津環濠集落図

南尾谷 (みなみおだに)

郡津神社の南、免除川との間の谷を指しており、西は長宝寺小学校の敷地である。

南尾の集落が成立した後、その南尾の人々によって開かれた谷であるところから付けられたものである。免除川の氾濫原として南尾の崖(がけ)付近が一番低い。

今はほとんど埋立てられたが長宝寺小学校への進入道路の部分が谷のうちでも一番湿田であった。

耕運機が沈んで動かないほどであったという。この幅5㍍ほどの長細い田は郡津の環濠集落である一つの防御上の掘割か池ではなかったかと推定されている。

今はなくなった崖の竹やぶとともに貴重な資料であったのであるが。

東良 (ひがしら)

郡津の中心集落から見て東の地に新しく開かれた田畑地という意味での東頭(ひがしら)・頭(かしら)は、ものの始まりの意味がある。

郡津神社の東の田ということもうなずける。灌漑用のため池として今池(三つ池)ができれば、台地は畑からすぐ水田に変わり、豊かな池として約束される。

倉山・南尾の人々にとっては今池あっての水田であったと思われる。



今池 (三ツ池)

向口・迎口 (むかぐち)

郡津神社西の南北道路から東、今池までの地である。

郡津で口の付く小字名が向口と東の口である。いずれも郡津から倉治への出入り口になっている。東良・向口の境をくねくねと今池まで行き、今池の堤防伝いに東の口から出てきた倉治道と合流する一方、今池の南をまっすぐに東へ、やがて倉治の南ノ町へと通じている。

郡津から東への道路は南尾から免除川に沿って行く道、倉山からは向口からの道、中小路からは東の口からの道が三通りあることになる。

そして向口、東の口は出口の所がいずれもカギ型道路となり、防御の策が施されていることである。これは郡津が環濠集落として村が形成され、各村への出入り口を固めたようである。

東ノ口 (ひがしのぐち)

向口と同じく、郡津から東の出入り口に当たる。向口と道路形態は全く同じ形をとっている。

向口は倉山の集落から出た道が南北道路に突き当たり、カギ型に曲がって東へ向かう。

東ノ口も中小路の集落から出てきた道が倉山から

の南北道路に突き当たり、カギ型に曲がって東へ向かう。



東之口

そして今池で向口からの道と一緒に一本道になり倉治の西口と結ばれている。

このように村からの出入り口は防御上特に気を使って家を建て、道路に工夫をして、村を守ることに重きをおいていたことがうかがえる。

大塚・梅塚（おおつか・うめつか）

古代、交野郡の郡衙が倉山の地にあった。



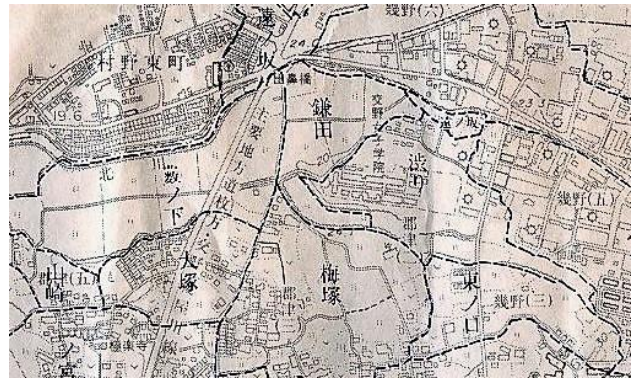
そのころ、郡司が交野郡の支配者であり、富と権力を掌中に収めていたであろう。

その郡司の墓が古墳として大塚、山崎、梅塚の台地に築かれ、自分たちの栄華を誇ると同時に大きな塚が富と権力の象徴であったであろう。

現在も山崎の地に丸山古墳が残っている。

大塚、梅塚も同じような古墳が並んでいたに違いない。今はすべて畑地や田になってしまい、見る由もないが、倉山辺りから北、西北に自分たちの大きな塚を見るにつけ、郡司の威勢の大きさを示したもの

と思われる。



渋り（しぶり）

梅塚、東ノ口の北の幅100程ほど、深さ10程ほどの東西に伸びた谷があった。

この谷とその北の交野女子学院の台地をも含めて「渋り」と呼んでいる。



そしてこの谷を特に「渋り谷」と呼んで区別しているようである。

「しぶ」とは井戸水などの水さびのたまっている所をいう。台地の湧き水が谷の水となり、常にじめじめしている。

おまけに金気水のため茶褐色に泥や砂に色が付き、いかにも名前どおりの渋り谷である。

鎌田（かまた）

交野女子学院の建っている台地の北側の水田地帯との間をいう。

「かま」とは淵（ふち）という意味や、鎌（かま）のように曲がった地形、蒲（がま）の生えている土地といったいろいろな意味がある。鎌田は北川の氾濫原で、しかも交野女子学院の建つ台地に先を遮られているため、水はけが悪い。

今でも台地に近い方は泥田、湿田が多い。
蒲や蓮根（れんこん）が生えていた所、淵のように泥深い田といった意味から「鎌田」と付けられたようである。

藪ノ下（やぶのした）

東高野街道より西の北側から南側の水田地帯を指す。地形的には鎌田と全く同じで北側の方が高く、南側の台地端が一番低い。

よって、小川も台地下を東から西にかけて流れている。藪ノ下という地名は、大塚から山崎にかけての台地の端が急な崖で高さ10～15㍍くらいある。この崖崩れを防ぐため東西に長く竹やぶになっていた。

藪の下の田は日照りが悪く、米の収穫も悪い。さりとして竹やぶのため条件の悪い土地という意味で「藪ノ下」と付けたようである。



遠ノ坂（とおのさか）

北川より以北、郡津の地域であるが、ここを遠ノ坂というのには、今の水道路では理解できない。昔の東高野街道は北川の出鼻橋を渡ると左手に松林の丘、右手に竹やぶが連なる光景に出会う。道は台地上へと曲がりながら上がって行く。道の左右は水田と畑が段々状にある。盆地上に上がれば、右に竹やぶが続き、左手に畑が連なる非常に寂しい道である。四辻まで人家はない。郡津の北尾から四辻まで寂しい道となる。追いはぎが出、きつね、たぬきも出そうな道であった。北川から墓地へ、台地上へ右に左に曲がり

ながら次の集落まで、はるかな道のみをもった坂道といった意味から付けられたものであろう。



遠ノ坂

=わがまちふるさと

かたの地名をたずねて= より

- 小字地名について、もっと詳しい説明をして欲しい
- 例えば、地図上に印をつけて、引き出し由来などを簡単に解説してもらいたかった
- そんなことわかりきってますがなあ～スミマセン
- PCのテクニックも知識のない私（涙）
- でもなあ、地名を学ぶ、知るには、その土地に足を運ばなければならない、まわりの状況も大切である
- まず、行って、見て、聞いてメモを取る事ですわ!
- 添付の地図とにらめっこ、わからない思います
- コロナが収束したら一緒にあるきましょう

郡津の地名、続きます

次号 9/6